＜加盟館紹介：自治医科大学図書館＞

図書館への誘い：展示ケースとオアシスとしての空間の演出

青 木 孝 雄*

自治医科大学図書館

本学の図書館も現在の地域医療情報研修センター内に1981年9月移転して以来、早いものでもう満11年を数えることとなった。この図書館の概要については、本誌29(4) : 317-323, 1982で紹介しているので、今回は、これまでに触れていない新しい観点から、当館のいくつかの試みを紹介したい。新しい観点とは図書館の「見場」と「雰囲気」である。そして「見場」とは見た目にどう魅力的に映るかであり「雰囲気」とは居心地の良さのことである。もちろんこのことはアカデミックな大学図書館という前提に立っての話である。

要はその図書館らしい魅力を的確な資料構成とか空間や資料の機能的配置であるとかを工夫することによっていかに使いやすい図書館にするかという問題と同時に考えてみようとすることにほかならない。

当館のある「地域医療情報研修センター」は、典型的な複合建築物である。

1階は入学式、卒業式などをはじめとする大学の諸行事や学会等に使用される講堂、大会議室、本学卒業生をはじめ、地方自治体病院の各種の職種の方々のための研修室、研修事務室等で構成され2階は1階と同様の研修室、中講堂、それと図書館から成っている。3階は全域が図書館であり4階も3階閲覧室の自然採光部分と積層書架部分

が図書館によって占められており、残りの4階部分は研修受講者のための宿泊施設である。すなわち図書館は2階の大部分と3階全部と4階の一部を占めていることになる。

このような複合建築物の場合にはそれぞれの部門の機能とか広さが全体的なバランスによって決まる訳であるがそれゆえに独立館として最初から考える場合とは別の意味で難しい問題も出てくるのである。

その一つは2階の渡り廊下から入って図書館入口に至る長い導線をどのように演出するかであった。中講堂への入口横から図書館開口部までは15～6mの距離であり、しかも図書館の入口開口部分はその前方の空間を確保するために少し中に入っている。

この2階ロビーからの図書館入口までの細長い導線を何とか図書館への魅力的なイントロとして

写真1. 展示ケース全景

*Takao AOKI: 〒329-04 栃木県河内郡南河内町薬師寺3311-1.

(1992年12月24日 受理)

写真2. 展示ケース

活用したいとの考えから講堂入口横の柱からの2スパンの空間を思いきった展示ケースにすることにした（写真1）。この1スパンの長さは柱と柱の間の内りで5,400（単位mm）でありここにW1,800×3、h2,100 d450の展示ケースを2基置くことにした。この特注ケースは上部300、展示部分1,000、下部800であり、展示ケースは1,800の1ブロックの中に900の長さのガラス製の棚が2列に数段組み合わせることができるよう工夫されている。

ここに図書館のもつアカデミックな雰囲気伝えながら、魅力的な出会いを予感させるディスプレイを演出してみようという訳である。

結論は、①図書館施設の魅力的PR、②大学のPR、③卒業生のPR、④ミュージアム的な要素の導入、⑤新刊案内等の要素を満たしたものにすること、であった。

具体的には①は図書館全体の案内を Information to Users の形でパネル化すると同時に各施設のカラー写真を2階、3階の配置図に合せて展示すること（写真2）。②は大学の立地以前の写真（県畜産試験場）の展示および大学のこれまでの沿革を示す年表、大学本館、病院全景写真、校旗、校歌等の写真の展示であり、③は卒業生の著作の展示、④は表彰状等の展示、中国医科大学、北京医科大学との学術交流に係わる記念品、内外

の古医書等の展示であり、この中には、「解体新書」の復刻版、ファブリキウスの「視覚・声帯・聴覚」（羅文）1660年刊、トーマス・バルトリヌスの「アナトミア・リフォルマータ」（羅文）1669年刊等が含まれている。⑤は最も簡便な新着図書案内の方法としてA3の用紙に入るだけの図書を背を下に横に並べてその背文字部分のみをカラーコピーしたものをを用いており、丁度新着展示棚の再現となっている。

もう一つの点は図書館内部のどの位置に利用者のくつろぎの部分の設けるかであった。

結論的には2階のエントランスに隣接する場所をロビーとし、ブラウジングコーナを設けたこと、3階のおよそ7m幅の自然採光を施した、天井の高い閲覧席ゾーンの中央にかなりゼイタクなラウ

写真3. 2階ブラウジングコーナー

写真4. 3階ラウンジ

ンジを設けたことである（写真3, 4）。

2階のブラウジングコーナーには、文藝春秋、山と溪谷、家庭画報、National Geographic 等の一般誌、岩波、新潮文庫、岩波新書、講談社現代新書等（写真3の左側奥の壁面）と日刊紙等が

備えられており、1日中BGMが流れている。さらに図書館のボランティアによるコーヒーサービスのコーナーがあり、レンタルのコーヒーマーカーで、いつでもコーヒーが飲めるようになっている。このサービスはビジネスではない訳であるが、このサービスを維持するために必要な最小限の負担を利用者からのこれまたボランティアとして頂戴している。この場合一杯のコーヒーのお志は70円ほどであり、このサービスを始めて数年になるが、概ね好評であり、金銭的にも十分このサービスを維持できる状態になっているのは何よりうれしいことである。

「見場」と「雰囲気」の問題はセンスの問題でもあり、口に言うほど容易なことではないと痛感しているが、今後も留意したい大切なことである。